

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

COLLEGE REPORT

第7号

〈APRIL 1995〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP

敬和学園大学学生氣質(ピンからキリまで)

特集 SPECIAL REPORT

阪神淡路大震災ボランティア体験座談会

国際金融“体験”ゼミ合宿(東京)/ボランティア指導室から



敬和学園大学第一回卒業式が3月21日に行われました。この日晴れて卒業できたのは237名で、北垣学長から一人一人に卒業証書・学位記が手渡されました。その後、名誉学位記が近寅彦新発田市長、長谷川榮作前聖籠町長、ジョン・モス敬和学園高等学校前校長に贈呈され、卒業生を代表して、英語英米文学科の大関陽子さんが、「真っ白だった大学のキャンバスに一つの土台の色を塗り上げてきた私達の努力は、一人一人が手と手を携え、人の輪を大切にし、人を愛し、協力し合ったからこそ実を結んだのだと信じています……敬和スピリットをもって今度は社会という大きなキャンバスに、より良い社会の構築に寄与していく所存です。」と答辞を読み上げました。

敬和学園大学 第一回卒業式



もくじ

敬和学園大学学生気質(ピンからキリまで)…1	学長室だより……………9
利根川 裕教授の講話から……………4	国際金融“体験”ゼミ合宿(東京)……………10
図書館の機械化と将来……………4	ボランティア指導室から……………11
ゼミ紹介……………4	退職にあたって……………12
(特集)阪神淡路大震災ボランティア体験座談会・6	1995年度入学試験結果……………13

CLOSE UP.

敬和学園大学 学生氣質 —ピ ンから キリまで—

教授 片桐邦郎

この小冊子の編集者から、敬和学園大学の学生氣質について書けという依頼があった。

敬和学園大学は、今年三月でまる四年がすぎ、五年目を迎える。たった四年で、学生のカラーをきめるのは、早急だろう。しかし、そろそろ敬和学園の学生は……などと言う評価がささやかれることがあるので、この際おもいきって一教員の「たてまえ」ではなく「本音」を書こうと思った。

「副題の（ピ）ンからキリまで」は決してふざけて付けたのではない。まさに「本音」である。私はこの小文を今年の新入生のために、また、在学生のために、さらには今年卒業していく卒業生のために書いた。そして、さらに、それらの学生・卒業生の保護者、保証人の方々にたいして書いた。最後に、敬和学園大学の設立にお力添えをしてくださった地域の方々のために、地元の大学でどんな学生が育っているかを心配してください。学生のことを書く前に、私のことを少し書く。私は、この大学では「欧米文化論」を担当している。この科目は、三年生の必修科目だから、出席していれば、今年の卒業生と三年生とは、全員知っているはずである。

ある。しかし、あと半分の学生は、特別に知るほか全く知らないのが、現状である。

したがって、すべての学生を知っているわけではないが、私の知っている範囲の学生について書くことにする。

（キリの学生とは）今年の一月のことである。私の最後の講義があった翌日のことだ。

廊下で昨日欠席していた学生とばったりと逢った。そこで、昨日はどうしたーと尋ねたのだが、その学生の返事を聞いて私は奈落の底に突き落とされたような気持ちになってしまった。帰省地から来るのが遅れたのだが、

「親が一日ぐらい遅れたっていいだろう」と言った」というのである。私が、返事につまつたのは、自分の欠席を親のいった言葉で言い訳したことである。二十才をすぎた学生が親の言葉を言い訳にしてなんらならないのだ。

何人のキリの学生を思いうかべると、どうも背後にキリの親が浮んでくる。

勿論、お仕事が忙しい方もおられるだろう。

しかし、返事もない方もある。四年になつて、なにか問題がおこる学生は、不思議にこうした返事もなかつた保護者の「子弟が多いのだ。

保護者や親御さんのなかには、うちは自営業で時間がないという方もおられるだろう。

しかし、仕事は、家族や子供たちのためにやっているのではないだろうか？

親子の断絶を感じる学生もある。落第したら、もう学費をだしてくれないだろう。どうしても卒業したいーと自分が努力しなかったことを考えないで、自分の都合のよい希望だけを繰り返す学生がいる。

これは、敬和学園大学だけに観られる現象ではない。私は、前任校の慶應義塾大学で、学習指導主任をしていた時、あと一年の結果で、翌年三月になると除籍になる予定者の数十名の本人と保証人に集まつていただいた。大学としては、いろいろ指導しているが、それそれが自分で努力しないと来年は間違いなく除籍になるだろう。その時になつて大学は不親切などと言わないでくれと話をしたことがある。

大学は多い。どこの大学にも学生は、沢山いて、ピ（）ンからキリまでいる。ただ、ピ（）ンが多いかキリが多いかのちがいである。

学費だけだったら、あとはアルバイトで適当にやれといつて親子が断絶している家庭に「とんびが鷹を生んだ」ような才子・才女が生まれはしないだろう。

敬和学園大学のピ（）ンの学生の話をしよう。

私が敬和学園大学に赴任して、最初に驚いたのは、学生の自己表現力の貧困さであった。

そこで学生新聞をつくらないかと呼び掛けた。たいてい答えはノーであった。四、

今年の卒業生が三年の時に、新潟のホテルに保護者に来ていただきて、指導の私たちと話し合う機会をつくったのだが、大学から手紙を出したが、欠席された方が数名

あった。

CLOSE UP

五名を集めるのに一年半かかった。なかなか部ができないので、途中でやめていった学生もいた。一人と断った学生のなかに、ひとりピンといえる学生がいた。

なぜこの学生がすばらしいと判断したかというと、自分がやりたいことがはっきりしていて、それを理由に断つたのである。

「わたしは、英字新聞がつくりたいのです。」

断られてこんなに気分がよかつたことはなかった。私が作りたかった学生新聞は日本語である。しかし横書きの新聞で、欧文の記事ものせられるようになつていて、将来、英語で記事を書いてもらいたいと言つてわかった。

この学生は、英語の教職課程を履修して、四月から東京で高校の英語の先生になる予定である。英字新聞は、その後刊行された。

ただ、単発的に一回あとが続かなかったようだ。しかし、自分のやりたいことをはっきり自覚して、それを実現させる行動力はすばらしい。きっとよい先生になると想い、期待している。

(ピンの学生の家庭とは) 自分のやりた

いことをはっきり自覚している学生のもう一つの例をあげよう。この学生は、ある教育認定試験を受けたいので、教えてほしいと言つてきた。私の研究室は、新聞部の部室として解放しているから、いろいろな学生が出入りしているが、そこで教えていた。その時、私の書棚にあった西洋画とジャポニズムの本を見て、母は絵が好きですと言つたので、貸してあげたが、丁重なお返事とともに、自分の感想が書いてあつた。

そればかりではない。認定試験を受ける子供といっしょに勉強して、その模擬試験を受け、さらには、今年入って、本試験を受けに二人で上京した。短い期間の勉強だから合格は無理だろうが、私が嬉しかったのは、このような親がいたら、子供も一

生懸命に勉強するだらうということである。大学生ではあっても、子供には親が理解してくれる、見守っていてくれるというのは、励みになるのだ。

このように書くと、めぐまれた豊かな家庭を連想される方もあるだろう。しかし、その家庭は、去年春、学生の兄弟が他県の大学入学したので、その仕送りもあるのだろう、このお母さんはパートの仕事にておられるそうである。

もう一人の例をあげよう。前に述べた保護者との会で、おいでいただいた保護者には全員に私の名刺をさしあげて、いつでもご連絡くださいとお話をしたが、四年になつてあるお父さまから電話があつた。子供の就職のことで話がしたい、というのである。

本人ともどもお会いしたが、とくに学生の卒業論文から、就職などいろいろに話がとんでこのお父さまとは大変気が合つた。だからといって、「この親子は、理解しあつた理想的な親子」というわけではない。

ある時、廊下でこの学生とすれ違つた。様子がなんとなくおかしい。「どうした?」と尋ねたら、「昨日、父と言い合いをして」と言つた。「晩泣いたそうで、瞼(まぶた)がはれている。「お父さまはあなたが憎くておっしゃっているのではない。」と話したが、理想的で平和な家庭などはないだろう。よい家庭とは、すくなくとも子供がいまだ大学でなにをしているかを気に掛けてくださる親のいる家庭である。

(家庭の「しつけ」)

いま大都会の大学でも全国、地方から学生はきているのだが、私がこの大学に赴任してきた、驚いたことの一つに、学生の「しつけ」のないことであった。

私の研究室は、新聞部の学生や外国人留学生が自由に入り出する。しかし、入る時は、「失礼します」と、いう学生が大部分である。ある時、部員のひとりだが、挨拶もなく、歌をうたいながら入ってきた。私がいるのに、挨拶もしない。この学生は、その前日の講義を欠席していた。その理由を述べるわけでもない。「ちょっと待て、ここは研究室だ。歌をうたうな」と叱つたが、本人はなんで叱られたかもわかっていない顔できよとんとしている。

この瞬間に、私は「この学生の親の顔が見たい」と思った。

「しつけ」とは、「躾」と漢字で書く。つまり、身を美しくする、美しくみせる」とである。

私の研究室で、何人の学生が、打ち合せをしている時に、ほかの先生が用事で入って来られた。だれもしらん顔をしていて、立とうともしない。私は全員を叱つた。これは研究室で来訪者は、私を尋ねてきた方なのだから、どなたかいらしたら、全員すぐ立て、その方が座られるまで、立つていろ。といった。

すくなくとも、三、四年生は、もはや未成年ではない。やがて社会人としての就職活動をするだろう。

いま、どこの企業でも卒業をとつて、四月からは、数か月の研修にはいる。簡単にいえば、今までの言葉使い、挨拶、部屋の入り方、電話のかけ方から、すべてを習うことになる。

私の研究室にあった本(「芸術新潮」の「いき」の特集)を見て、貸してくれたう学生がいた。翌日きたので、「どうだった芸術新潮は?」と尋ねたら、「ああ、あの春画ですか?」と答えがかえってきた。私はこの瞬間、絶望し、彼女にその本を貸すのではなかったと後悔した。

企業では、それぞれ符丁や隠語がある。

一月十三日（金）

利根川裕教授の講話から

一月十三日（金）アッセンブリ・アワーの講師として新潟経営大の利根川教授が演壇に立たれた。演題は「私の教育論」。これはいわば私の人生論であり、現在の学校

はおしなべて、先生を選べない不幸の下に置かれている。せめて一生涯師と仰ぐ人物を求めて得よと力説された。利根川教授が師と仰ぐ亀井勝一郎氏の門をたたいて弟子入りをした時からの師弟交流の体験をもとに、説得力のあるお話を続いた。

また深夜テレビの司会をした経験から、テレビ文化論に及び、「すっぱぬいて」「ぎんぎらぎん」「面白おかしく」見せるのがテレビであり、二度目にはもう報道価値は失せる一過性文化である。派手な立ちまわりに惑わされることなく、過去、現在、未来を見きわめ、底流なるものの存在を把握することが若者の生き方を左右する」と説かれた。

経営大の学窓より眺める台地は、教授が五十年前に不毛の労働を強いられた、学徒運動員の夢の跡であったという。同じ場に集う平成の学徒こそ、実り豊かな青春を手にさせたい。そんな越後人利根川裕氏の願いが、ここでの大講堂に場を移したまま、聴き入る若者たちの心をゆさぶっていた。

かねてからの文部省の指導事項であり、図書館職員としては開学以来の念願であった図書館の機械化がついに実現することになりました。全国の大学でも全く機械化されていない図書館は非常に少なく、新潟県内に昨年開学した三つの大学も、すべて機械化されています。

敬和学園大学の図書館もやっと他の大学と同じスタートラインに立てたわけです。具体的に機械化をするとはどういうことなのか。また、これまでとはどう変わることかについて触れてみたいと思います。

現在、本学図書館の蔵書冊数は製本雑誌も含めて二万六千冊余りあります。そのすべての図書にバーコードがついているシールを貼りつけます。

図書貸出券は、新年度より学生証と一体化され、学生証兼図書貸出券になり、そこにも一人一人違うバーコードが印刷されています。今まで利用者の皆さんには、図書貸出券とブックカードに必要事項を記入してもらわなければなりませんでしたが、今後は何も書かなくても貸出・返却の手続



図書館の機械化と将来について
図書館主任
松原洋子

特集

阪神淡路大震災

ボランティア体験座談会



出席者

安藤 則子

内田 直

五十嵐 毅

新保 成司

中村 真保美

小川 文勝

長澤 雄介

本学二年生
本学一年生
本学二年生
本学二年生

松蔭女子学院大学四年生
本学ボランティア主事
本学ボランティア主事

総務課長補佐・司会

安藤さんは二月十五日から二十一日まで、内田さんは同じ日から三月四日まで、五十嵐君と新保君は二月十七日から二十一日までそれぞれ滞在されたわけで、私が行った時は様相が違っていたかも知れませんが、貴重な体験をされたことで、感想をお聞きしたいと思います。

また、今回は松蔭女子学院大学四年生の中村真保美さんについてお話を伺いました。中村さんは新発田市から大学に進学され、神戸市灘区のマンションで今回の地震にありました。本学の救済ボランティアに一緒に参加したいとの申し出がありましたが、残念ながら日程が合わず行けませんでした。私は、私も会計係の小竹と一月二十日の夜行で芦屋市まで行つて来ました。これは、敬和学園創立以来、大変お世話になつた方の被災の連絡があつたからです。その当時はまだ電車はJRの甲子園口までしか開通していないく、一時間半も歩きました。

で働いている人の友達で、紹介していただきました。内田さんは誘つて二十一日までの予定で行つたのですが、内田さんはその後も残り、三月五日に帰つてきました。長澤…「めぐみホーム」とはどういう施設なのですか。

安藤…「障害者のいこいの家」と言って障害者の集会場なのですが、一般の方達も参加して交流をしている民間の施設です。

五十嵐…私は安藤さんから紹介していただいて新保君を誘つて行きました。

長澤…と言うことは、「めぐみホーム」から、あっ旋で神戸に入られたわけですか。

安藤…そうです。実際は阪急六甲の神戸学生青年センターの現地事務所に所属しましました。

長澤…そこではどんな活動をしたのですか。安藤…主に灘区と東灘区を中心に避難所や自宅を回り、障害を持つた方々の情報を伝えたり生活のお手伝いを行いました。

内田…「被災障害者支援の会」と言う団体があるので、この会ができたきっかけは、尼崎教会の牧師先生で車椅子で生活している方がおられて、その方の住宅が被災され、救出されたのですが、避難所では飲まず食わずで、数日間車椅子に座ったままの状態でした。数日後教会員の方が苦労して探し当てたのですが、その方以外にも障害を持つた方で困っている人がたくさんいらっしゃるのではないかということに気づいて、尼崎教会が中心になり呼び掛けたところ、一六団体が集まりました。

支援の会では京都に一時避難所を設けていて、期間が短いのですが、少しでも休んでいただければと生活ができる所が何軒かあって、ボイラード沸かしたお風呂に介助付きで入ることもできます。もちろん送迎もします。

長澤…本日はお忙しい中お集まり下さいまして、有難うございました。

今回の震災は、未曾有の災害ということが、早くからテレビ等でつぶさに見られただけですが、実際に現地に行くと違った感覚になつたと思います。

実は、私も会計係の小竹と一月二十日の夜行で芦屋市まで行つて来ました。これは、敬和学園創立以来、大変お世話になつた方の被災の連絡があつたからです。その当時はまだ電車はJRの甲子園口までしか開通していないく、一時間半も歩きました。

安藤…私の先輩が京都の「めぐみホーム」

もします。

阪神淡路大震災ボランティア体験座談会

配りました。

長澤…それでは実際に行つてみた感想をお聞かせください。

安藤…報道では見ていましたが、現地に行き直接倒壊した建物を見て、凄い衝撃を感じました。

内田…まだ帰ってきたばかりで頭の整理ができない状態なのですが、神戸の人達は前向きの人が多くて、人とかかわっていくのが上手で、震災があつたのが神戸だったから皆こんなに頑張れるのだと思いまして。避難所を回って、障害者の方に何かお手伝いすることはいかが聞くと、周りの人方が良くしてくれて水も食べ物も運んでくれていると言うのです。だから助け合って支え合つていくことができる人達なんだなあ

と思いました。

先程長澤さんが甲子園口から一時間半歩いたとおっしゃいましたが、私は活動の一つで、「えんぴつの家」という作業所に芦屋に住んでいる知的障害をもつた女の子を送り迎えする仕事をしていたのですが、普通なら片道一〇分だったのが、運が悪いと二時間以上もかかりましたが、その大変さが良く分かりました。

小川…私の次男が大阪に勤めていたので、時々そちらへ行きましたが、関西の人は言葉のせいもあるのでしょうか、人なつっこいような気がしますね。そして人の気を見るのが上手のようですね。

それでは新保君の感想を聞かせてください。

新保…僕はボランティアに行くという気構えではなかったのですが、行ってみると既に救援体制ができるで、最も手助けが必要な時期が過ぎている様だったので、もっと早くいけば良かったなあとthoughtいました。

と言うのは、僕も災害に遭われた障害者の自宅を訪問して、お手伝いすることはない

いか聞いて回ったのですが、多くの人は周りの人達が良くしてくれて、不自由はしていないと言わされたからです。

五十嵐…確かにボランティアに参加している人が多く、大きなことはできませんでし

たが、細かい日常生活には不自由していませんよ。うです。僕たちがもっと慣れていたら良く言う「痒いところに手が届く」よう

なこともできたのではないかと思うし、今振り返ると、もっと手助けできることがあつたような気がします。帰ってきて半月ほど

たちますが、ボランティアの人達も少なくなってきていますが、今あの被災者の方々はどうしているのかなあと考えることがよくあります。

内田…各避難所で活動していた医療団体も少なくなっています。

五十嵐…今後神戸の人達だけで助け合つて行けるのか不安に思います。特に、避難所もいつまでも開放できるわけではないし、住宅問題等、緊急を要する検討課題がたくさんあると思います。

内田…それが今現地のボランティア全員の悩みです。私達のグループでは引き継ぎが大切で、何處でどんな障害者がどんな問題を抱えているのか細かく申し渡しています。

灘福祉センターに情報を提供してやっと行政も動き出したのでそちらに任せしていく形になつきましたし、行政から何處にどんな障害者がいるかといった情報を聞けるようになります。

小川…私も報道等で行政の立ち遅れを感じていましたが、それ程大きな災害でもあったと言うことだと思います。

（皆さん同じ思いだつたようです。）

中村…「支援の会」は学生のボランティアグループなのですか。

内田…避難所を中心に学生はたくさんいましたが、「支援の会」は牧師を始め、教会関係者が多いグループでした。

長澤…ところで皆さんは大学のボランティア活動を経験していたわけですが、その経験を生かすことができましたか。

五十嵐…僕は敬和学園高校出身ですので、高校では燕の老人ホーム等でボランティアをしましたし、大学一年のときは「大峰寮」、

二年の時は「ふれあいコンサート」に參加しました。初めて障害のある人と接したとき感じたショックはありませんでしたが、

そのときは比べ物にならないほど責任のある仕事でした。

安藤…私も抵抗はありませんでしたが、ペ

アで活動したとはい、大学で皆と一緒に活動したとはいえ、大学で最も気構えからして違いましたね。

長澤…やはり自分の意志で行動するという何ですか。例えばトイレの問題や隣の家族

ませんでしたか。

内田…新保君も言つていましたが、もっと早く行つていればそういった問題はもっと多くお聞きすることができますが、

私達が行つたときには、隣の家族に氣を使わなければならぬ障害者は既に病院等に移っていました。だから私達がお話を伺ったのは、一応日常生活はできる人が殆どでした。それでも、隣との関係に氣を使うと言つておられた家族は多かったです。

安藤…今まで自宅で一緒に生活できたのに、被災したため施設に入らなければならなくなつて、非常に残念だと家族の方が言つておられました。

五十嵐…本当にもっと早く行つていればと悔やれます。

内田…各避難所で活動していた医療団体も少なくなっています。

五十嵐…今後神戸の人達だけで助け合つて行けるのか不安に思います。特に、避難所もいつまでも開放できるわけではないし、

住宅問題等、緊急を要する検討課題がたくさんあると思います。

内田…それが今現地のボランティア全員の悩みです。私達のグループでは引き継ぎが大切で、何處でどんな障害者がどんな問題を抱えているのか細かく申し渡しています。

灘福祉センターに情報を提供してやっと行政も動き出したのでそちらに任せしていく形になつきましたし、行政から何處にどんな障害者がいるかといった情報を聞けるようになります。

小川…私も報道等で行政の立ち遅れを感じていましたが、それ程大きな災害でもあったと言うことだと思います。

（皆さん同じ思いだつたようです。）

中村…「支援の会」は学生のボランティアグループなのですか。

内田…避難所を中心に学生はたくさんいましたが、「支援の会」は牧師を始め、教会関係者が多いグループでした。

長澤…ところで皆さんは大学のボランティア活動を経験していたわけですが、その経験を生かすことができましたか。

五十嵐…僕は敬和学園高校出身ですので、高校では燕の老人ホーム等でボランティアをしましたし、大学一年のときは「大峰寮」、

二年の時は「ふれあいコンサート」に參加しました。初めて障害のある人と接したとき感じたショックはありませんでしたが、

そのときは比べ物にならないほど責任のある仕事でした。

安藤…私も抵抗はありませんでしたが、ペ

アで活動したとはいえ、大学で皆と一緒に活動したとはいえ、大学で最も気構えからして違いましたね。

長澤…やはり自分の意志で行動するという何ですか。例えばトイレの問題や隣の家族

は、大切なことではないでしょうか。

ところで、大勢の人達と接する中で、何

か嫌なことはありませんでしたか。

内田…そうですね。私達が想像していた以上に、障害者への偏見が強かったです。

「障害者へのボランティア活動です」と言つただけで、避けられたことがあります。

まだ社会に認められないケースが多いのに驚きました。

五十嵐…ボランティア参加団体が多いからだと思うのですが、皆バラバラの活動をしていましたような気がします。被災者の方も同じ活動をする人が次から次へと訪問するわけだから、「もう結構です」と言う声も多かったです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…一〇人以上いると公認されるのですが、確かに非公認の避難所にいる方は、不自由されたようです。

小川…本学ではボランティア活動というの

は日常の事ととらえていますが、中村さんはどういう感覚を持っていますか。

中村…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてるので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてるので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。

内田…私も一旦新発田に避難してきたのですが、神戸の事が気になつて避難所でボランティアをしている友達に聞いたら、今避難所は人間関係が難しくなつてので止めたほうがいいと言わされました。やっぱり避難生活も一箇月を過ぎるとイライラして、ボランティアに疲しくあたられたり、苦情も多いらしいです。ボランティアはあくまで手助けに過ぎなく、限界を感じたとその友達が言つていました。そんな状況なので中途端な気持ちでは来ないでくれと言うのです。私もボランティアは経験がありませんので、不安な気持ちが強く、最初から積極的に参加できる自信がなかったので、神戸から新発田市に引っ越しかしなければならないこともあって、参加しませんでした。善意の気持ちだけでは相手に伝わりにくいもののがうです。

長澤…公認の避難所とそうでないところとでは、救援体制が違つたようですね。



食事には不自由しませんでした。お金があれば何でも手にはいる時期でした。

中村…そもそも地域によって被害の差に大きな格差がありましたね。

長澤…最後に一言づつ本日のまとめをお願いします。

新保…僕の兄が神戸に住んでいたので、このボランティアは他人事ではありませんでした。報道では何度も見ましたが、やはり実際に行ってみないと被災者の本当の気持ちちはわからないものだと感じ、貴重な体験をしたと思います。ただ、今はボランティアの人数がとても多いのですが、それだけに、みんな引き上げた後の対応が難しいのではないかでしょうか。

五十嵐…結局何にもできなかつたような気がします。する方もされる方もボランティアという活動に不慣れだったのではないでしょうか。

安藤…被災者の方々にとつて、今何が必要なのかわからなくて、役に立ったのかしさか不安です。

内田…自分ができたことよりも、人に会つて自分が教えられた事の方が大きくて、人のために行つたのではなくて、自分の為に行つたのだなあということを感じて帰つてきました。ある被災者から、「問題があつた所から逃げちゃ駄目だよ、新潟に帰つてもずっと神戸に目を向けていてね」と言つられて、逆に励まされました。

長澤…「頑張ってね」と声を掛けたら、「お前も頑張れよ」と言われて、その方がより心に届いたと言うことですね。

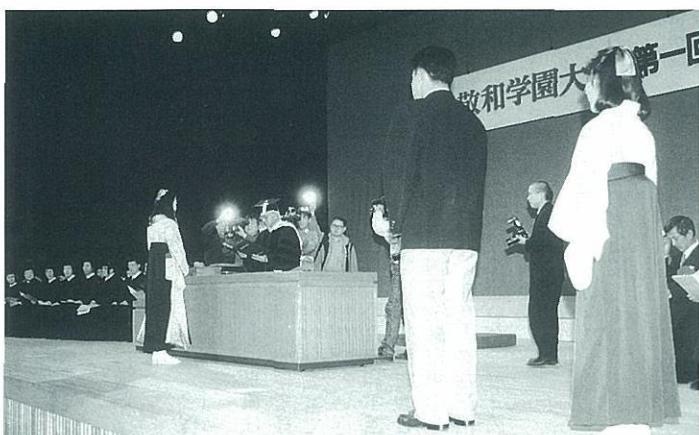
最後に小川さん一言お願いします。

小川…大災害を生身の体で感じ取つたわけで、その報告は貴重なもので。無事に行つて来れて本当に良かつたと思います。これから皆さんの活躍を心からお祈りいたします。

長澤…私も二十一日に芦屋に入つたのですが、お見舞いに行った方が既に大阪に避難されたことがわかつたので、持参した食料を近くの避難所に置いて来たのですが、食料がかなり山積みされていましたね。救援物資は、被災後経過日数によつて、必要なものが変わつてくるのではないでしょうか。安藤…私はも食料を持って行って、バナナ一本で一日過ごす覚悟をしていましたが、

学長室だより

敬和学園大学は第一回卒業式を三月二十日に挙行され、二三七名の第一期生が卒立つていきました。この大学の設立にかかわった理事たちをはじめ、教職員一同にとて、これは感慨無量のことです。神の力強い導きが彼らの上に豊かにあるようにと、心から祈るものです。

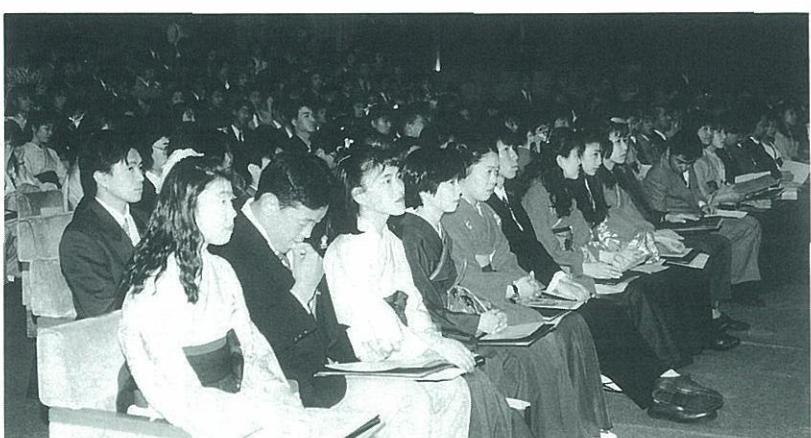


この第一期生が四年前に入学したときの人数は三一六名でした。四年間に三〇名が何らかの理由で大学を去つていきました。敬和学園大学になじめなかつた人、大学そのものに失望した人、理由は様々でした。一人は病氣でなくなり、一人は交通事故で痛ましい死を遂げました。そして四九名が留年のやむなきに至りました。四九名は多いという評価もできますが、他方また、敬和学園大学が教育上の厳しさを学生に要求してきた結果でもあります。留年のままつた学生の中には、「私は大学というものをなめていたように思います」と告白した人もありました。

この卒業式で本学は初めて名誉学位を出しました。これは学問、教育、芸術、文化、社会、国際交流などに貢献した人で、本学が表彰するにふさわしいと考えた人に贈られるもので、本年は次の三人、すなわち本学の誘致に貢献された新発田市の近寅彦市長、同じく聖籠町の長谷川榮作前町長、それに、敬和学園高等学校の設立に最初からたずさわり、高校の副校長、校長を長らく務め、昨年九月に引退されたジョン・モス宣教師の三人に贈られました。

この三月末をもつて、二人の専任教員が退職することになりました。歴史学の安藤弘教授は健康上の理由で、経済史の道重一郎助教授は東洋大学に移籍のためです。有効な先生方を失うことは誠に痛いことです。が、多少の時間をかけても、すばらしい後任を搜すことで教授陣を強化したいと考えます。

もう一人の退職者は仙澤計美事務局長です。仙澤さんは大学の設立準備室長として



(北垣宗治)

二年間指導に当たり、大学の開学後は四年間事務局長を務めました。大学後援会は、仙澤さんのイニシアティヴによってできたものですし、また新発田市聖籠町にたくさんの敬和の支持者を作つてこられました。写真家としての腕前は数々の受賞作品が示すとおりです。長らくの単身赴任に堪えて仕事をされたことに対しても、私は心からねぎらいの言葉を述べたいと思います。

迫真の取引、経済を実感

敬和学園大学教授

大海宏

経済の国際化と東京への一極集中現象はますます加速するばかり。地方の大学で経済学を学ぶ学生にとっては、いくら教室で理論を勉強しても、実感が伴わないという悩みが常につきまとだ。

新潟県の敬和学園大学で国際金融論を教える大庭宏教授は、ゼミの学生に東京の国際金融市场の姿に触れてもらおうと、ユニークな三泊四日の「東京ゼミ合宿」を開いた。ゼミの成果について執筆してもらった。

外銀・商社など訪問
百の講義より現場の声と姿

情報落差に戸惑い

私が、三十数年にわたった都市銀行及び証券会社勤務を終え、新潟県に新設された人文系私大へ赴任してみると、戸惑うこと多かった。とりわけ悩まされたのが、東京との情報落差である。

私の担当科目は国際金融論。経済学のかでも、特に複雑難解な分野である。カリキュラムの品ぞろえ不足もさることながら、決定的なのは日常のなじみがないことである。講義で何回となくカワセ、カワセと力説し、二回や三回板書しても、テストで正確に「為替」と書ける学生は少ない。需要を「重要」、需給を「自給」と書いたりもする。ある学生はJカープ効果を「J株効果」と書いた。JT株の上場が話題を集めた昨年秋のことである。

そこで私のゼミでは、ルーチンの勉学に加えて、二つの課外活動を試みることにした。なじみがないなら、なじみになってしまおうということである。

第一には、皆でお金を出し合って実際に株を買うこと。株価には内外経済の動きが凝集されている。乏しい小遣いを割り引いての投資であれば、楽しみや痛みにひかれ経済の実践的研究に身が入るに違いない。もう一つが「東京ゼミ合宿」。机上で学習したことなどをこの目で確かめに東京へ行く。

そこには日本で唯一の国際金融市场があるからだ。二年間の成果はどうであったか。株式投資は、私の観点からは、半分成功、半分失敗であった。皆で決めた株が、買った直後から棒上げを演じ、結局一度として買値を下回ることがなかつたからである。痛みを感じて対策に知恵を絞るような場面には遭えなかつた。

目前で五〇〇万ドル買う
一方の東京合宿には十二月下旬の足掛け四日間を充てた。見学・研修先は大体外國為替七割・株式二割とした。

外國為替実務の最初の学習は、有力外銀の一つにお願いした。学生たちはまずSFのような何十階も上まで吹き抜けの超近代的なビルに度肝を抜かれた。ディーリングルームへ入ると、一人の机に二つも三つもテレビの受像機があつて、別々の情報や数

字やグラフを映し出している。日本人と外国人が入り乱れて働いている。飛び交う言葉は英語が多い。

この道三十年の超ベテラン部長が、模擬のつもりで何千万ドルかのディールをロイター・システムを使い実演して見せた途端、錯誤で別の外銀と本当の取引をしてしまつたことが判明。やや慌て気味の部長は、「、二分端末のキーをたたき続けて（交信はすべて英語）、ディールの取り消しに成功した。一同感嘆。その後の同氏の、ディーラーとマーケットについてのレクチャーは迫真力があつた。

為替の現場はもう1カ所。ある大手商社を訪れた。日本を代表する総合商社のグローバルな取引と、それには外國為替がついて回るという説明を受けたあと、ディーリングルームへ。担当の課長が、私たちの「見通し」を確かめた上、五百万ドル（当時のレートで約5億円）を見通しに沿つて実際に銀行から買うという大サービスを演じてくれた。学生には現実世界のこととは思えなかつたに違いない。一同、ドルよ上がりと祈りつつここを後にした。他には外為ブローカーと日銀を見学した。

荷為替信用状取引の実務研修では、私の吉菴の都銀を煩わした。担当部長に案内してもらつて、大勢の女子行員が英語の船積み書類をときばきと処理してゆく光景が、特に女子学生には印象的だったようである。

就職活動にも効果

株式取引の研修では、私がかつて勤務した四大証券の一社を訪問。永代橋の証券トレーディング本部でレクチャーと見学を済ませた後、兜町の取引所までの移動は、全員黒塗りのハイヤーに分乗して送つて頂いた。降りてから、自分はクラウンだった、

地方学生、東京で国際金融“体験”ゼミ合宿

私はブレジデントと、四日間で一番興奮した瞬間だったかもしれない。統いて、東京工業品取引所の天然ゴム取引を見学。東京では今やここだけが伝統的な板寄せ売買を行っている。立会場に集まつた場立ちの手と指による売買表示を、取引所の擊た關係が流れるように巧みにさばいて、値段と売買の成立に導いてゆく。活発な日だった。いつまでも見飽きなかつた。

夜も勉強に充てた。第一夜の最初は、旧知の大蔵省高官の講話。「国際通貨マフィア」として修羅場の体験を交えた本音のエピソードがたくさん聞けた。学生たちは、その数日後には、米国シートルで日本側代表として日米金融サービス分野交渉に臨む同高官の姿をテレビ画面で発見、更に感動を深くした。次いで経済専門誌「朝日新聞」記者の、国際政治経済の想像もつかない水面下での絡みを次々とあらわにしていく豪快な談義に、全員が醉つた。もう一晩は、論理的な思考と表現能力をつけるため、ディベート研究第一人者の講師から、三時間余りぶつ続けに講義と実習の指導を受けた。

三泊四日の東京合宿は、過密スケジュールで、学生たちは、心身とも疲れ切つて新潟へ帰つた。しかし、キャンパスの授業の何ヵ月分に相当しただろうか。収穫は大きかつた。国際金融論が身近になつただけにとどまらず、株式投資及びディベート訓練と合わせ、その直後から始まつた就職活動で大きな効果を生んだ。特に金融志望の学生（私のゼミには多い）にとっては、業界を選別するに当たつての具体的知識や、入社試験の面接時の話題に活用できたようである。

B表

2年次の活動	
2年生の時にやった	162
3年生の時にやった	36
4年生の時にやった	19
未了	66
計	283

A表

1年次の活動	
1年生の年のボランティアワーク	155
2年生の年のボランティアワーク	12
3年生の年のボランティアワーク	1
1年生の時の個人活動	94
2年生以降の個人活動	7
未了	14
計	283

ボランティア指導室から

すべての学生にボランティア体験を、という大学の指導はどう具現しているのか。この春社会に巢立つ第一期生の実践状況から見てみよう。先ず、大学が学生にどのようなボランティアを求めていたのか。

一年次は大学行事のボランティア・ウィーク（九一年は九・十七から四日間）に参加するか、個人で任意に活動内容を決めて実行する（二〇時間程度）。共に一二〇〇字位のレポート提出が義務付けられている。その実践状況はA表の通りである。一年時代に行われなかつた活動は

一年次は二〇時間程度のボランティア活動を自分で実践してレポートを提出する。この結果はB表に示す通りである。卒業間際に責を果たした学生も少なからずいるが、約三分の一が二年次の活動未了のまま卒業して行く。ボランティア・ウィークの活動後、九三年、四年と同じ設問でアンケート調査を行つた。設問のうち「来年ももっとボランティア活動をしたい」と対して「そう思わない」と答えた者の割合は三三パーセント、即ち全体の三分の一の傾向を示す。

ここに二年次活動について、一期から三期までの実践状況を示す表がある。各期における未了者の割合D表を見ると、さすが一期生はよい実績を残したと言えよう。まだ向上的余地あり

C表 (人)

種別	年度別2年次活動		
	91	92	93
済	216	142	74
ア・未	67	76	53
イ・計	283	218	227

D表 (%)

イ/ア	23.7	34.8	67.4
-----	------	------	------

とは言え、期を重ねる毎に、未了者の数が増加する傾向をどう受けとめたらよいか。

ボランティア活動をしているのにノーワイソンの学生もいる。未了のまま卒業し進級する相当数の学生達は、本来自主性がモットーであるべき活動を強制されているとして反発しているのであるうか。ノルマのためにする活動が果たしてボランティアと言えるのか、という疑問が、活動不発に終わらせているのだろうか。せめで指導室を訪れて語って欲しいものと思う。

一九九五・三・十一日付

日本経済新聞に掲載
(日本経済新聞社及び大海教授の了承を得ております)

二年以降で取り返しているが、未了者は十四名である。

退職にあたつて

国際文化学科助教授

道重一郎

私は、本年三月末をもって、敬和学園大学を退職することになった。設立以来四年、設立認可申請から数えると七年間のおつきあいに、ひとまずピリオドを打つことになる。本学の設立は認可申請の段階から難産であったが、設立準備室関係者の努力と大學を敬和学園に作ろうと希望する多くの祈りによって一九九一年四月敬和学園大学人文学部は設立された。難産の子は良く育つたとえ通り、本学は一九九五年三月にいたって一年次から四年次まで約千名が学ぶ大学が完成し、初めての卒業生が卒立つまでに成長した。

四年前の開学初年度、東京から赴任した私にとって新潟のもつイメージは「雪国」の一言につきていた。友人、知人のだれかれどなく新潟に赴任するという私に対しても「雪が大変でしうね」という言葉が思わずってきた。東京、もしくは太平洋側に住む人間にとて、新潟・日本海側のもつイメージはやはり「雪」である。ところが四月に新潟へやってくると、たしかに東京よりも二週間ほど季節が遅れているとはいえ、春真っ盛りであった。

大学は田圃のなかにあった。JR佐々木の駅からは歩いてゆうに三〇分はかかった。バスは一時間に一本しかなく、その上急行バスは近くに止まらなかつた。しかし、田

園のなかを、春の暖かい光のなかを歩いてくると東京はないゆつたりとした気分を味わえることを知つた。田園の脇を走る用水の水も光輝いていたし、流れの音も心地よかつた。今はすっかり便利になつて、佐々木駅からはJRの汽車に合わせて大学からバスができるようになつたし、急行バスも止まるようになって新潟からのバスの便も大分向上した。しかしバスに乘らずに時間を気にせず歩く気になれば、自然を身近に感じることができる。私は、この幸せな気分を六月まで味わうことができた。六月といえば東京では梅雨に入っている。新潟では梅雨がはっきりせず、うららかな季節が閑東よりも長く続くことを始めて知つた。いま車に乗っている人もたまには車をおりて歩いてみると、何か新しい発見ができるのではないかと思う。

さて、こうして私の敬和学園大学における生活が始まった。一年目学生数は三百十数名、教員の数も学長以下一五名というこじんまりした所帯であった。グランドは整備されておらず、テニスコートもなかつた。やる事なす事みんな初体験といった趣があつた。不安もあつたが、学生諸君の顔には希望があふれていたように思う。次々と学生サークルができ、私もバドミントン部と自転車部の顧問になつた。二年目にはラクロス部も地道に練習を重ねて、ともに充実したサークルとして発展して来てくれている。私の記憶がたしかならば、学外の大会でカップを獲得したのは、本学ではバドミ

ントン部が最初だったのではないだろうか。大学では一年目から経済学、二年目から経済史そして四年目にヨーロッパ研究を担当した。いずれにしても経済学とその関連分野だが、私はこの学問が単なる技術学ではなく人間を温かい目で見つめかつ冷静に分析して、人間社会の望ましいあり方を見通すものであることを学生諸君に伝えようとしてきたつもりである。果たしてその気持ちが通じたかどうかは、少し長い目で見直す必要があるだろう。

開学後四年たつて完成年を迎えた私は個人的都合で敬和学園大学を去ることになつた。本学を去るにあたつて、敬和学園大学が二世紀に向かって大きく羽ばたいていくことを祈つてやる。我が国の公教育におけるミッションスクールの果たした役割はきわめて大きく、既に長い伝統をもち社会的にも高い評価を得ている学校も多いが、敬和学園はこうしたキリスト教主義にもとづく学校の伝統をふまえて、新潟県に新たな種を蒔こうとして設立された学校である。たしかに、これまで新潟はキリスト教主義学校にとって決して豊かななりをもたらしてはこなかつた。だが、敬和学園には既に三十年近くの高等学校教育の伝統があり、敬和学園大学はその伝統を受け継ぎながら、国際的な視野を養うキリスト教的ヒューマニズムに基づく地域に開かれた高等教育機関として設立されたのである。本学が建学の精神を基本として、独善に陥らず地域のさまざまな人々との交流を通じて、新潟における最初のキリスト教主義大学としてこの地に新た伝統を作り出されよう祈つてやまない。

1995年度 入学試験報告

〈1995年3月22日現在〉

(単位:人)

区分		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学手続者数	競争率
推薦入試	英語英米文学科	45	78(50)	78(50)	56(39)	56(39)	1.4
	国際文化学科	45	59(19)	58(19)	54(19)	54(19)	1.1
	計	90	137(69)	136(69)	110(58)	110(58)	1.2
一般試験	英語英米文学科	35	257(107)	255(106)	103(55)	41(19)	2.5
	国際文化学科	35	395(87)	390(85)	132(49)	42(14)	3.0
	計	70	652(194)	645(191)	235(104)	83(33)	2.7
試験計	英語英米文学科	10	63(33)	54(25)	19(12)	9(6)	2.8
	国際文化学科	10	50(16)	46(15)	26(11)	12(4)	1.8
	計	20	113(49)	100(40)	45(23)	21(10)	2.2
大学入試センター試験利用入試	英語英米文学科	50	428(196)	417(187)	157(90)	62(35)	2.7
	国際文化学科	50	535(139)	526(136)	190(80)	58(21)	2.8
	計	110	963(335)	943(323)	347(170)	120(56)	2.7
合計 (外国人留学生を除く)	英語英米文学科	100	506(246)	495(237)	213(129)	118(74)	2.3
	国際文化学科	100	594(158)	584(155)	244(99)	112(40)	2.4
	計	200	1,100(404)	1,079(392)	457(228)	230(114)	2.4
外国人留学生	英語英米文学科	若干名	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	—
	国際文化学科	若干名	3(2)	3(2)	1(1)	1(1)	—
	計	若干名	3(2)	3(2)	1(1)	1(1)	—

注1. ()内は女子で内数。

2. 社会入試の志望者はなし。

キャンパス日誌

11月

- 11日 公開講座 第6回「情報化社会のあとしあな」
講師 小野 哲教授
就職決定者との懇談会
- 18日 公開講座 第7回「国際化時代の教育の課題」
講師 柴沼 晶子教授
公務員試験合格者との懇談会



- 23日 推薦及び、編入学入試
- 25日 公開講座 第8回「平和研究の成立と発展」
講師 塩屋 保助教授
- 27日 北垣学長 水原町、笹神村主催 国際理解講座
北垣学長 生涯学習センターで講演
「国際理解はとなりの人から」
- 28日 就職懇談会
- 30日 第46回 (臨時)教授会

12月

- 2日 推薦入試合格発表
- 5日 就職決定者との懇談会
- 9日 就職ガイダンス
- 14日 第47回 教授会
- 16日 クリスマス行事(キャンドルサービス、キャロリング、パーティー)



- 17日 大学・高等学校教職員合同研修会
- 20日 冬期休暇開始
- 28日 仕事納め

1月

- 4日 仕事始め
- 9日 学校法人敬和学園 常任理事会
後期講義開始
- 11日 第48回 教授会
- 14日 大学入試センター試験(第1日目)
- 15日 大学入試センター試験(第2日目)
- 18日 現在におけるキリスト教主義研究フォーラム
- 20日 阪神淡路大震災の義援金を募る
- 21日 後期講義終了
- 23日 学年末試験(2月9日まで)

2月

- 1日 一般入試(前期日程)8会場(本学、新潟、上越、仙台、東京、富山、名古屋、大阪)にて実施
- 3日 学校法人敬和学園 常任理事会
- 6日 第49回 教授会
- 7日 北垣学長 豊栄ロータリークラブにて講演
- 8日 北垣学長 水原ロータリークラブにて講演
- 10日 一般入試(前期)、センター試験利用入試、外国人留学生入試合格発表
春期休暇開始
- 13日 公務員講座開講
就職ガイダンス「女性の身だしなみ講座」
図書館機械化の作業開始
春期短期留学説明会



- 15日 北垣学長 センスアップカレッジにて講演
- 16日 就職ガイダンス
- 17日 北垣学長 高校のチャペルにて講演
就職個別面談
- 22日 神田ゼミ卒論発表会
- 27日 就職模擬面接
- 28日 公務員模擬試験
人事教授会